も食べよ』『アノ、御飯も、ふたりきりのこと、暑いじぶんでおすゆへ、よぶんに炊いておへん、おひつは空どす』『そんなら、仕様がない、お茶を汲んで、茶を』『あなたお察しの通り、火鉢には、火はおへんよつて、お茶なんぞは、いれられしまへんえ』『それでは、水なと汲んで、おいで』『イーエ、モウ井戸に水もおへんえ』『ババ、馬鹿にすな、これお時、こゝは誰の宅や、イヤサア、こゝは一ツタイ誰の宅や、お前のカラダをひかして、斯うして置くのも、皆私しが、してやつたのや』『そんな事をあなた、仰しやらぬかて、能う知つて居ますのえ』『そんなら、たまに私しが、出て來たのに、何に一つ、私の云ふ事を聞かず、めしを喰ふと云へば、めしはない、茶を汲め、茶はない、水はない、エヽ、ナナ、何んと云ふ事を言ふのぢや』『若旦那、妾の云ふ事をば、おわかりに、なりまへんのどすか、妾のやうな賤しい者でも、いま暫くのうち、様子を見た上で、伏見のお宅へさしてからに、御親類から、も、御相談の上で、入れてやらうと云ふ、お噂も聞いて居ります、依つて妾が、可愛いと、思召すなら、どうぞ、けふの處は、歸つて、お呉れやすと、これ程までに、お願ひ申して居りますのにあなたは夫れが、おわかりになりまへんのどすか』『オリヤ、わからわい(怒る)ナア〳〵云ふていりや、宜いかと思ふて、生意氣な事を、吐しやがるな……コレ私が腰に、差して居るのア、何やと思ふて居る』『妾は婦の事ゆへ、何も存じまへんが、刀やと思ふて居ます』『エヽ、刀は誰でも知つてゐるわい、これは、村正と云ふ銘刀や、汝、グズ〳〵吐すと、この刀で、貴さま、ブチ斬るぞ』『これは、變つた言葉を仰しやる、妾の身の上、あなたのお身の上をば、思ふて妾が申す事をお、聞き入れなく、斬ると仰しやるなら、いかにも斬られませう、サアお斬り遊ばせ、お斬り遊ばせ、あなたに、ひかされてからは、妾のからだで、妾のからだとは思ふて居りません、サア斬るなと、どうなと、遊ばせ、サア斬つて、サアお斬り遊ばせ、斬つて赤ふなかつたらおあしは入りまへん』『人を馬鹿にするなえ、新田西瓜ぢやあるまいし』『サアお斬り遊ばせ』『ヨシ、斬つてやる』斬るつもりやない、おどすつもりで、鞘のまゝパシリつとなぐると、鞘が破れてからに、無殘やお時の、肩先より、ザクーリ「アレー」と云ひさま、お時は其處へドサーリと倒れる、此の物音に、下女のお松はびつくり、しまして「アレ若旦那アブナイ、お待ち遊ばせ」と留るのを、又もや、一太刀、ザクーリ、斬り付けられて、ドーンと夫れへ倒れましたそれみい、云ふことを聞かぬよつてにや、こんな處へ寢んと、早う起きんか、コレお時、お松も、おんなじように、何してる、コレ〳〵」じつと見ますと、鞘は破れて刀に血が着いてゐますゆへ、びつくりしました「シモター」顏は眞蒼になつて、刀を持つてふるへて居ります、こちらは番頭忠八、便所より出て來まして、座敷へ參ります「若旦那、ながい間、おまたせいたしまして、さゞめし御退窟で御座りましたらう、誠にすみまへん、若旦那……アレ、どこへお出になつたのやろ」床の間を見ますると、村正の銘刀が御座りませぬからサテは若旦那は河原傳ひに、お時さんの許へ行たのであらうと、番頭氣もソゾロに、富永町へさして走つて參りました、おもてから「お時さん、モシお松どん……、うちらは眞暗がりで、どうしたんやろ、門を開けはなして置いてからに、内は火も燈さず、お時さん、オイお松どん」『番頭やないか』「ヤアーあなたは若旦那……」と云ふなり、頭の上から、一太刀、頭は二つに割れて、ハジカミ、キヤツ――、ドサリーツと「何しに來やがつた、こいつも斬られに來やがつた、馬鹿め」總三郎は、人三人殺したから、氣はかみすつて、頭の髪はサンバ